「葦」第40号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院
看護部長　佐　伯　恵　子

巻頭言を書くに際して、「葦」発刊の意味を考えました。

第一は、看護研究が掲載されていることより、看護部看護研究誌としての意味である。昨年度、「葦」が定期的に発刊されていることより、医学中央雑誌データベースへの収録を申し込み、採択されました。このことは、研究結果がインターネットを通じて広まることであり、同時に、幅広く検閲をうけることを意味しています。研究者としても襟を正すことが必要とされます。

第二は、年報的な意味合いも過去にはあったようです。年報にするのであれば、各種委員会や部署ごとの１年間の活動実績などの掲載が必要とされます。今後検討されることと思います。

いずれにしても、「葦」という誌名からは、フランスの思想家パンセの＜人間は考える葦である＞という名言を思い出します。人間を「葦」に例えたパンセは病弱で、若くして亡くなるまで、身体の不調をかかえていたと言われています。水辺で見かける「葦」は一見、弱弱しそうに見えますが、実は突風に身をまかせることが出来、稲のようにしなやかさを有するそうです。パンセは「葦」に自分自身を重ねてみていたとも言われています。

このようなことを考えますと、「葦」に込めた奈良医大看護部の先人の懐の深さを感じざるを得ません。

看護部の先人たちが、「葦」に込めてきたことは、「突風に身をまかせながらもしなやかさを忘れない」精神かもしれないと考えました。

当奈良医大附属病院が高度救命救急センター、感染症センター、精神医療センター、総合母子医療センターをつぎつぎと設置してきた経緯からもわかるように、大学病院が担うべき主なる役割は、高度医療・専門分化した医療の提供です。その中で、大学病院で働く看護師に期待される能力は、静脈注射の実施やNPの誕生など、医師と協働できる専門的な能力です。このような医療提供の状況の変化に身をまかせながらも、忘れない「しなやかさ」とはなんだろうかと考えました。

第一は、看護実践の基本的な姿勢で忘れてはならないこととして、「謙虚さ」だと思いました。「謙虚さ」は、ケア提供者には必須の資質だと思っています。看護経験が豊かになり、安全で正確なケア実施ができるようになっても、いま目の前にいる人が安心してケアを受けておられるかと、気づかいができる人に備わっているものだと思います。「謙虚さ」は、ケア提供者に、自省するこころを誕生させます。また、研究する場合も「謙虚さ」が必要です。研究課題にもよりますが、特に質的な研究の場合、研究対象者に多大な心労をかける場合があります。しかし、研究成果が、研究対象者の協力なしでは豊かなデータが得られないことを自覚すると、研究者としての謙虚さが得られると思います。

第二は「繋ぐことへの気づかい」だと思います。専門分化していく中で、繋ぎ役が看護に求められてきます。たんに１＋１＝２になるだけの繋ぎ役ではなく、５にも１０にもなるような繋ぎ役が求められています。そのためには、「繋ぐことへの気づかい」が必要となります。組織や人々に対して、一時的な停滞はあるとしても常に発展していくことへの信頼があることが基本だと思います。特に、協働の会議では、ポジティブな気づかいで運営にあたれるかどうかが、試金石になるように思います。

いずれも、ケアするこころ、ケアの精神であると思っています。ケア実践の時だけでなく、職場での対人関係や、研究・教育する場合もこの「しなやかさ」を忘れることなく、常に大事にしていきたいと自分にも言い聞かせています。